

底釣り タナ の

最近の傾向

底釣りは晩秋から春までの水温が低い時期に行われるのが一般的だ。小さなサワリやアタリに目を凝らし、へら鮒を釣り上げていく魅力は、たまらないものがある。

しかし夏場だって底釣りは面白い。へら鮒が活動的になる夏の底釣りは、冬に比べてウキが断然よく動かし、そのウキの動きを楽しむだけでなく、自分の技術習得に利用し

てほしい。

底立て、エサの調整、タナの探り方など、ウキがよく動く夏にこそ、しっかりと技を身に付けてしまおう。

底べつたりでなく、底より少しだけ上にへら鮒がいるのが、多くの釣り場の傾向だ。

その、上にいるへら鮒を、底に呼び込んで釣る技術が求められている。ハリスが以前より長めになり、段差が広くなってきたのは、そうした理由による。タナをずらし過ぎ

底釣りの基本タックル

竿 できれば水深に合わせて竿いっぱいで底が取れるのがベスト

トンボ
ウキ
羽根寸12~20cm
(パイブトップ・ムクトップ)

ミチイト 0.8~1号

オモリ 絡み止めタングステンオモリと板オモリの2点付け

ハリス 0.4~0.5号
極端に水深が浅くなければ、50cm前後の長さ(上40cm下47cm)でスターK段差は7~8cm。動きが悪ければ、上50cm下57cmくらいまで伸ばす。

ハリ 4~6号

エサ 実寸大



基本は1cm大

エサの大きさ 直径1cmを標準にして、ウキの動きの応じて、ウズリ気味なら小さくしたりしっかり付けるとか、ウキの動きが悪いたら大きく付けたりして対応する

ず、上バリトントンくらいがいいのも同様だ。

ベレット系のエサが有効なものも、よく知られた事実。ベレットのパワーが、数・型ともによい結果をもたらしてくれるだろう。

オモリ 実寸大

オモリのサイズ
羽根寸16cmのウキで、絡み止めタングステンオモリ1g1個と0.25mm厚板オモリを1~3cm



+



~



単品使いから始めよう!

① 基本パターン

ペレ底200cc+水100cc



+



ペレ底というエサは

底釣り用ベレット系の新エサ「ペレ底」は、良質のベレットを含んだ、非常に使いやすいエサである。

良質のベレットとは、良質のタンパク質、つまりへら鮒が好むアミノ酸がたっぷり含まれたものを指す。それがベレット特有の強い集魚力を発揮するわけだ。そしてベレットの重みも見逃せない。深い底までエサをよく持たせてくれるうえ、ウワズリを防ぐ効果がある。

エサのまとまりがよくて手になじみやすく、他の駄エサとも相性がいいので、底釣りエサの幅を広げることができるはずだ。

「ペレ底」に水を注ぎ、指先で混ぜるだけ。水を吸いきると硬めのタッチになる。エサが落ち着くまで若干時間がかかるの

で、竿を出す前にエサ作りをするとい。エサ持ち(ウキのなじみ)を確認しながら、リズムよく打ち返していこう。

ウキが動かない/バラケさせて寄せたい

② バラケさせて寄せるブレンド

ペレ底200cc+ 白べら100cc+水150cc



+



+



+ 効果UP



100cc

+



30cc

基本パターンではウキが深くなじんで、返しが遅い。ウキが動かないというときは、まず手水でやわらかくしてみよう。エサ付けを角張らせるのもよい。それでもへら鮒の寄りが見られないときは、開きのいいブレンドへ。このエサは、やや、やわらかめに仕上がる。バラケ性が高まるので、ウキのなじみ幅に注

意して、練って使おう。これでもアタリがない場合は、さらに「白べら」を追い足してもよい(「ペレ底」と半々くらいまでが限度)。また、「粒戦」100ccに水30ccを吸わせておき、エサの一部分にだけ加えて打つと、寄せ効果をさらに高めることができる(寄ったら元のエサへ)。

決めアタリが出ない

③ エサ持ちをよくする!

ペレ底100cc+ダンゴの底釣り冬100cc+水150cc



の基本エサでなじみが少ない、なじんでもすぐに返してくる。こんな場合は、エサが持っていないことが多い。当然、いい決めアタリも出ないだろう。基本エサは硬めなので、これ以上硬くするのは避けよう。できる範囲でエサ付けをしっかりとさせたり、エサを練ったり、エサ付けを大きめにするとよい。

ここまでやっても、エサ持ちが足りないことでアタリが出ないなら、よりハリ持ちのいいブレンドに作り替えてみよう。

硬めに仕上がるこのパターンは、ハリ持ち抜群。そのままではウキの上がりが遅くなるようなら、手水でやわらかくしながら使うようにする。

カラツンが出てしまう

④ やわらかく、しっかりと!

ペレ底100cc+ダンゴの底釣り冬100cc+
粘カスプーン1杯+水200cc+
バラケマツハ300cc



底釣りでカラツンの場合、3つの原因が考えられる。1つめは代表的なエサの硬過ぎ・持ち過ぎだ。2つめはその正反対。エサ持ちが足りずにカラツンが出ることもある。3つめはタナの問題。底立ての失敗や、底の掘れも原因になる。この場合はすぐに底立てをやり直すこと。

エサの持ち過ぎが原因なら、 を参考に、まずやわらかくし

たり、ハリ付けを小さくすることから対応してみよう。

また、エサが持たないなら、 を参考に、練ったりハリ付けをしっかりとさせることから始めてほしい。

ハリ持ちを高める上記のブレンドも効果が高い。ウキの動きを見ながら、徐々にやわらかく練って使ってみよう。

ウズリがはげしい!

⑤ エサ付け、ハリスの長さ調整で対処

ウズリ対策

エサ付けを小さくして早アワセをしない!!

なじむ前のアタリ

ウズリがアタリでからの

ハリスの長さを詰めてスムーズになじむようにしよう

ウズリったらこのエサだ

100cc + 100cc + 150cc

ウキがなじむ前に上でへら鮒につかまって、なじみが出ない。もっと激しいときは、なじむ途中でエサが食われ、ウキが走っていくこともある。これは典型的なウズリ状態だ。対策として、エサ付けをしっかり小さめにして、早アワセを避けること。なじんでからの強いアタリにだけ焦点を合わせよう。ハリスを詰めてエサをスムーズにタナまで入れる

のもよい。へら鮒が初めから底より少し上にいるようなウズリなら、逆にハリスを伸ばすことでエサを追いやくなり、釣れるようになる場合もある。最近はこのパターンが多い。基本的に、バラケ過ぎたり軽すぎるエサはウズリを招きやすい。で紹介した「ベレ底」「ダンゴの底釣り冬」のパターンのエサが最も有効。

軽くてエサ持ちがいいエサ グルダンゴ系パターン

ダンゴの底釣り冬100cc+いもぷに30cc
+水130cc+バラケマツハ100cc

+ + + +

「ベレ底」を含むベレット系のエサの特長のひとつは、その重みだろう。重みがウズリを抑え、エサをタナまで持ちやすくしてくれる。しかしエサが重すぎることが原因で、カラツンやスレを出すこともある。そんなときは、軽くてハリ持ちのいいエサにすると、解消することができるはずだ。

最後に「バラケマツハ」で仕上げたこのエサは、特別なクセもなく、ごく一般的にやわらかくしたり練ったりして使え、ハリ持ちもいい。軽いエサのため、もしへら鮒がウズリを見せるようなら、また「ベレ底」を使った重めのエサにすぐ戻すといいだろう。